

[エッセイ]

□ 英語系サークル「えーけん」活動報告 □

黒河 広樹、小畑 綾夏、伊南 憲孝、坂井 久美子、百溪 江

薬学部 薬学科

Introduction of what the members of Eiken learned through authentic exposure to the outside world.

Hiroki KUROKAWA, Ayaka OBATA, Noritaka INAMI,
Kumiko SAKAI, Ko MOMOTANI

Abstract

The students in the School of Pharmacy enthusiastic in cross-cultural contacts and the English language had formed an activity group called Eiken. It followed the introduction in the lecture of being outside of Japan in the United States for 24 years prior to the appointment at Sanyo-Onoda City University, and how great to have such an experience while they are in college. The members of Eiken then gradually funneled down to multiple sub-focus groups for particular activities based on the specific interests of each member. Those activities range from watching movies, playing board games, interacting with local and oversea people, and applying conversational skills. Nonetheless, those activities all converge into their genuine objective, enriching exposure to the English language. In the course of seeking a way to extend their reach outside of Japan, one of the members, Hiroki Kurokawa, was awarded a travel grant from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology supporting his travel to the United States. With this support, he attended the Biophysical Society annual meeting in Baltimore, Maryland. He also visited multiple institutions, including three prestigious universities and the National Institution of Health research complex in Bethesda, Maryland. There were also several other students, including Ayaka Obata and Noritaka Inami, who traveled abroad on their own and gained profoundly meaningful experience outside of Japan. The destination of Ayaka was Malaysia, and Noritaka explored Philippine. Here we report what they saw, what they absorbed from what they were exposed to, and the momentous wisdom they acquired through the experience.

要 約

大学学部生、大学院生、大学教員と立場を変え、24年間を米国で過ごし本学に着任した教員が、薬学部学生に英語や多文化交流に興味がある者がいないかと呼びかけた結果集まった学生により、届け出団体「えーけん」が発足しました。英語全般や多文化交流という漠然とした興味を出発点にしたことから、活動内容はメンバー全員で同時に特定の活動を行うという形ではなく、英語での映画鑑賞に始まり、英語でプレイするボードゲーム、即席の英会話教室、地域の外国人との交流、米国の大学の学生とインターネットを通じた語学エクステンション等、各々の活動に興味がある者のみが三々五々参加するという自由な形の活動形態をとっています。そのような中、文部科学省による「国際学会等参加補助企画」に薬学部1年（当時）の黒河君が採用され、米国 Biophysical Society の年次総会に参加することになりました。また、元々外国に興味がある者が参集しているところから、本論共著者の薬学部1年（当時）小畑さん、伊南君のように長期の休み中に自力で海外留学を行い、海外経験をjする者も現れました。本報告は、それらの経験を通して各々が何を見、何を考え、何を学んだかについて各学生が記したものをまとめたものです。

国際学会参加と大学訪問を兼ねた米国訪問 薬学部1年(当時) 黒河広樹

Biophysical Society 年次総会

私は2019年3月2日から6日まで行われたBiophysical Societyの年次総会に参加させていただきました。海外の学会に参加してみたいという学生に資金補助をする文部科学省による「国際学会等参加補助企画」を紹介していただき、応募してみたところ、運よく採用されたおかげで参加することができました。同学会は、アメリカのメリーランド州ボルチモアで行われ、生理学分野では最大規模の学会の一つであり、世界中の学部生、大学院生、ポストドク研究員、大学の先生などが集結していました。

発表されていた研究は、DNAやタンパク質、細胞膜、ナノテクノロジーなど、多彩で、現時点の自分にとっては発展的な内容で理解が難しいと感じる部分もあったのですが、授業で習った部分もあり、面白さも感じました。規模が大きすぎてすべての発表を聞くことができなかつた点は残念でしたが、生理学分野の中でもさらに詳細な多くのトピックに触れられたことで興味が広がっていきました。スライドを用いた発表もあればポスターを用いた発表もあり、多様な形式で研究内容を聞くことができるとても良かったです。ポスター発表では自分と同世代の学部生が披露している時間帯もあり、質問をしてみると即座に返答して下さるなど尊敬の念を抱いたのと同時に刺激を受けました。

学会は研究の発表だけでなく、他の国の方々との交流の場としての役割も果たしており、今までに経験したことのないほど多くの国の方と出会えた点も貴重な経験でした。例えば、学部生や大学院生のみが軽食をとりながら交流できる時間や、今学会に初参加の人のみ交流できる時間帯があるなど多彩なプログラムが準備されており、気軽に参加できるものが多かったです。英語に自信もなく、異文化の方と会話した経験はほとんどなかったため初めは緊張しましたが、なんとかコミュニケーションをとれた時はホッとすると同時に楽しさも感じました。

前述したとおり、英語に関しては会話ができないレベルで行ったので苦勞した点多々ありました。相手の言っていることが理解できず何度も聞きなおしてしまったことや、話せないことに対する恥ずかしさからなかなか会話に入っていけないことも多く、難しい

と感じる場面もありました。ですが、話しかけてみると親切に理解しようとしてくれる人も多くおり、身振り手振りを交えながら必死にコミュニケーションをとることができた時は非常に嬉しく感じました。英語を話せるに越したことはないですが、コミュニケーションをとるうえで大切なことは言語よりも伝えようとする姿勢なのではないかと実感することができました。



バージニア大学。ロタンダ。

ジョージタウン、ジョンズ・ホプキンス、 バージニア各大学訪問

また、学会期間前後にはアメリカの三つの大学と研究所の様々な施設を見学させていただきました。一ヶ所目はワシントンDCに位置するジョージタウン大学で、小さな教室での授業風景や大学附属病院、さらには大学内の薬局を見ることができ、薬学部生として勉強になりました。道に迷っていると歩み寄って話を聞いてくれて、目的地まで案内してくれた紳士的な学生がいたことも印象的でした。二ヶ所目はメリーランド州ボルチモアに位置するジョンズ・ホプキンス大学で、日本とは異なる掲示物の貼り方や図書館内での勉強風景を発見できて面白かったです。日本では掲示物はきれいに整理されて近接する紙とは少し間をあけるのが一般的ですが、この大学では掲示物が何枚も重なり合っていました。図書館では本を使うというよりパソコンを使いながら過ごしている学生がほとんどでした。

三ヶ所目はバージニア州シャーロットビルに位置するバージニア大学で、今回訪問できた大学の中では一番印象に残っています。バージニア大学では、日本語を専攻している学生とレクリエーションをしながら交流したり、そのうちの数名の学生に大学内を案内したりしていただきました。レクリエーションでは日本で

おなじみの椅子取りゲームやしりとり、カードゲームなどを企画して下さり、会話をしながら楽しく交流することができました。日本語を学び始めて一年や二年の学生がほとんどなのに、日本人の私との会話はほとんど不自由がないほど円滑であり、驚きと同時に自分の英語の勉強不足を感じました。時々、バージニア大学の学生が日本語で何と言ってよいのか困っている場面がありましたが、私が〇〇?、□□?などいくつか提案するとそれだという感じで反応してくれて、相手の言いたかったことが理解できたということがありました。これは私が英語を話そうとしたけど何といえはよいかかわからず、もどかしい経験をしたのと似たような感覚でした。話し手が何かを伝えようとすれば聞き手がそれをなんとか理解しようとしてくれるという様子であり、英語でも日本語でも同じような感覚なのだと思います。



ロタンダでのレセプション。

大学内を案内していただいた時は、図書館や教室、食堂、さらにはいくつかの研究室も拝見することができ貴重な経験の連続でした。図書館はジョージタウン大学とは違った雰囲気味わうことができ、研究室は見たことのない設備や機器ばかりで魅力的でした。日本とアメリカでは地震の頻度が違うため地震の危機に対する対策が異なっていることを教えていただいたり、実際に研究している姿を見学させていただいたりできて、感じるものが多くありました。また、至るところで様々な国の方と関わることができ、アメリカという、多人種が存在する国ならではの雰囲気を感じることができた点も非常に新鮮でした。



NIH構内。

米国国立衛生研究所（NIH）訪問

また、ワシントンDC近郊に位置する米国国立衛生研究所（NIH）の見学も行いました。正直、実際に行くまでNIHという場所がどんなところであり、何をしているのかを全く知りませんでした。到着してはじめて土地の広大さに驚き、入るまでのセキュリティも厳しく、一部の施設内を見学させていただいた際には見たことのない機器しかなく圧倒されてしまいました。研究分野としては、癌や薬物乱用、ヒトゲノム、精神衛生など27の研究所で医学研究が行われているようで、興味のある分野でもあり、時間があればもっと色々な所を見学したいと感じたほどでした。世界から集まった研究者の人が、どのように仕事をしているのかを間近で見学できることは、中々ないことなので非常に光栄でした。現段階では研究を行ったことではないのですが、研究室に配属されて研究ということを経験すると次第にNIHを訪れることができた凄さを強く感じられるのではないかと思います。

米国での経験と印象

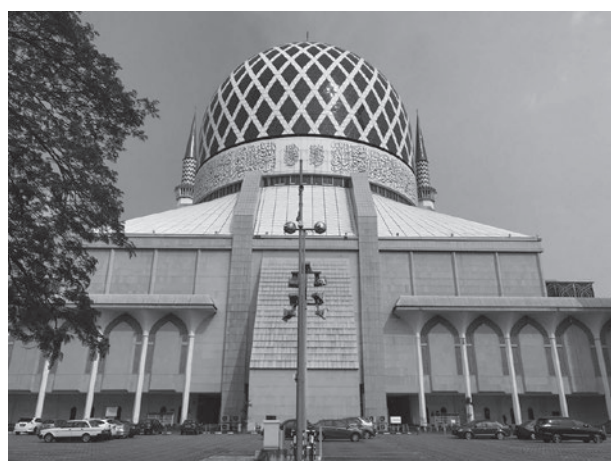
短い期間ではありましたが、アメリカという国で過ごさせていただいて日本との違いを感じる場面が多くありました。まず、食文化についてです。レストランで食事をした際に、日本ではなかなか見られない特大サイズのピザや、一人前と書いてあるものの、一人前とは到底思うことのできない量の料理を目にしました。量が多いことは想像していましたが、それを上回る場面も多くみられて驚きました。しかし、必ずしも全て食べきる必要はなく、多くの店では持ち帰るため

の容器も用意されており、実際に持ち帰って次の日に食べることもありました。また、支払いの際には、日本では馴染みのないチップという文化も初めて経験することができました。

続いて道路についてです。移動の際には車に乗せていただいたことが多かったのですが、当然ですが標識は日本と異なっており、見慣れていないので違和感がありました。信号機は青が進め、赤が止まれを意味する点は日本と同じでしたが、横断歩道の信号機はライトの形、色が異なっており、カウントダウンもあるなど違いがあって面白かったです。また、パトカーや消防車のサイレンの音も普段聞き慣れている音と違っていたため、最初聞いた時にそれがサイレンの音だと認識するのに時間がかかってしまいました。

他にも、日本の一般的な家庭ではシャワーにホースがついていて片手で持ちながら流しますが、アメリカでは上から流れてくるホースのないシャワーであったことや、気軽に訪れることのできるショッピングモールの中に銃が売られている店があるなど、身近な中にも日本とは異なる点を多く発見できました。環境を変えることで普段の生活の当たり前だと感じていたことが必ずしも当てはまらないことを実感することができて良かったです。

海外の学会、大学、研究施設見学、またアメリカの日常生活に触れるという未知の経験をすることができ、今まで出会ったことのない多くの方々と交流できたことは、非常に刺激的で挑戦してみて良かったと感じています。今回得た経験を糧にして、これからも色々なことに挑戦して頑張っていきたいと思います。



ブルーモスク。

マレーシア語学留学 薬学部1年（当時）小畑綾夏

私は2019年3月9日から3月23日までの2週間、マレーシアに短期留学しました。マレーシアでは、平日は語学学校に通い、休日は観光などをして過ごしました。ここではその中で、私が経験したことや感じたことなどについて述べていきます。

まずは観光についてです。最初にモスクについて述べます。モスクとは、イスラム教の礼拝堂のことです。マレーシアの国教はイスラム教であり、マレーシア人の約65%を占めるマレー系の人の多くがイスラム教徒です。マレーシア人全体の6割がイスラム教徒であるので、首都クアラルンプールにはモスクがたくさんあり、イスラムの聖なる日である金曜日にはお祈りが聞こえてきます。私は3つのモスクを見学しましたが、そのうちの1つが世界で4番目の規模を誇るマレーシア最大のモスクであるスルタン・サラディン・アブドゥル・アジズ・シャー・モスク、通称ブルーモスクです。白と青を基調にした壮大な外観が特徴になっています。観光スポットでもありますが、ムスリムにとっては大切なお祈りの場でもあるため、お祈りの時間と見学の時間は分かれています。また、女性が中に入るときは肌を覆うためのローブと髪を隠すためのトゥドゥンを着用します。見学の際はガイドの方が同行して、ブルーモスクに関することはもちろん、イスラム教の慣習・教えなども丁寧に説明してくれました。ガイドは英語でした。私はこの体験を通して、宗教に対する捉え方の違いやイスラム教徒の信仰心の厚さを感じました。日本では多くの人があまり宗教を意識せずに生活していると思いますが、マレーシアではイスラム教徒が口にできない豚肉やお酒を提供していない飲食店があったり、ローブとトゥドゥンを身に付けている女性を多く見かけたりと普段の暮らしの中に宗教が深くかかわっていることを感じられる場面が多くありました。小さな子供もモスクに来ていて、信仰心の厚さも感じられました。現地の人々の文化や習慣を肌で感じ、それを尊重して行動することの大切さを学びました。

次に、マレーシアでの生活についてです。私が一番驚いたのはマレーシアのトイレです。通常、ショッピングセンターや駅などのトイレの個室にはトイレトペーパーが備え付けられていないので、個室の外にあるトイレトペーパーから使う分を取って個室に入る必要がありますが、個室にトイレトペーパーが備え付けられていないのには理由があります。なんとマ

レーシア人の多くは紙を使わないのです。マレーシアのトイレには壁にホースが設置されているのですが、ここから出る水で器用に洗うそうです。ホースから出る水の量や勢いの調節が難しく、私には使いこなせませんでした。私がこの経験を通して思ったことは、自分の中の常識は国や価値観が変われば簡単に覆されるということです。日本にもウォシュレットはありますが、ウォシュレットを使ったとしてもトイレットペーパーは必要です。私がトイレットペーパーを使わないという選択をすることはまずありませんが、マレーシア人にとってはそれが普通なのです。必ずしも現地の人と同じようにする必要はないと思いますが、自分の国と異なる習慣に戸惑うことがあっても、その違いを理解することの大事さを学びました。



マレーシアのトイレットペーパー。

最後は私が通った語学学校についてです。授業はパワーポイントで作成されたスライドとホワイトボードを使って英語で行われます。1コマ55分の授業が1日に5コマあり、内容は文法の授業が2コマ、ライティングとリーディングの授業が2コマ、スピーキングの授業が1コマでした。私のクラスの生徒数は14人くらいで、生徒には中国系マレーシア人、イエメン人、イラン人、モーリタニア人などがいました。日本人も私以外に2人いました。英語で行われる英語の授業は、先生が言っていることを理解するのが少し難しかったのですが、新鮮で楽しかったです。また、私が面白いと思ったのは、出身国によって発音の仕方が違うということです。日本人も日本人に特有の発音をしますが、

それはほかの国でも同じで、知っている単語でも聞き取れないことが結構ありました。私が語学学校に行って考えさせられたことは、英語力と同じかそれ以上に積極性や自主性が必要なことがあるということです。特にスピーキングの授業で自分の意見や考えを発言する機会が多くありましたが、そのときに間違ってもいいからとにかく英語を話すことが大事です。仮に間違っていたとしても先生が正しい言い方を教えてくれるし、たくさん話した方がその分英語力もつくと思います。積極的に行動することが自分の目標を達成するために重要ではないかと感じました。

今回の短期留学全体を通して感じたことは2つあります。1つ目は、英語は便利だということです。マレーシアは英語が準公用語ということもあって、どこに行っても英語は通じました。また、語学学校内でも、他の生徒が休み時間に話すアラビア語や中国語は全く分からないのに比べて、英語ならなんとか会話ができたので、英語が話せるということなのだと改めて認識することができ、これからも頑張って英語を勉強していく良い動機づけとなりました。2つ目は、広い視野を持つことは大切だということです。日本では当たり前のことが海外では当たり前ではないということはたくさんあります。しかし、日本で暮らしているとそのことを意識する機会があまりありません。外国に行くと日本とは異なる文化や習慣を体験し、それを受け入れることが自分の視野を広げることにつながり、広い視野を持つことは柔軟な考えができる人になるために役立つのではないかと思います。

この短期留学は、自分にとってとてもいい経験となり、今回の経験を今後の生活に活かしていきたいです。



マレーシアの語学学校の教室。

フィリピン語学留学 薬学部1年（当時）伊南憲孝

私はフィリピンに2019年の3月10日から4月6日の間、英語を鍛えるために留学をしていました。基本的に平日は遠くに行かずに語学学校で生活をし、休日は遠くに出かけて見聞を広めるようにしていました。ここではフィリピンで何をし、何をやるのが出来たか、何故行こうと思ったかを述べていきます。



フィリピンの海。

まず、私が留学に至った理由を2つ挙げます。一つ目は、ひとえに最近では、社会に出るにあたって英語が重要視されてきていると考えたためです。現在は、薬学部2年生なのですが、漠然と卒業後の就職先を考える必要があると考えました。選択肢として、病院や薬局があるのですが、英語を習熟していると企業に就職という選択肢や、外国の大学院への編入という選択肢も視野に入ってきます。そのように選択肢の幅を広げるためにも留学を経験することは必要だと考えました。二つ目は、純粋に英語に慣れたいと考えたからです。私は英語系サークル「えーけん」の部長をしています。普段は、ジブリ等の映画を英語で観る、外国のボードゲームを遊ぶ、簡単な英会話を行う、アメリカのバージニア大学の人たちとインターネットを通じて会話する、外国のイベントをインターネットを通じたライブ中継で観覧する等といった活動を行っています。そのような活動を行う中、留学を通して英語に慣れればもっと英語を楽しむことが可能になるのではないかと考え留学をしようと決意しました。

次は、フィリピンでのことについてです。平日はマンツーマンまたは集団授業で、8時半から4時半まで、1コマ1時間の7コマ、授業をしていました。その間、

日本語は一切なしで、当初はかなり厳しいものでした。ですが、先生方は丁寧に説明してくれたので3日ほど経つとある程度は話をすることが出来ました。その語学学校ではアメリカ人と比べて話すスピードが遅めだったので、リスニングが不得手な私でも聞き取ることが可能でした。授業を通じてとにかくしゃべることが大切だと思いました。声に出さない限りは何も伝わらないし、上達もしない。だからとにかくしゃべりました。先生方も慣れたもので意思を汲んでくれましたし、文法、発音、アクセント、別の言い方など、自分の英語が上達する方向に誘導してくれました。これによって、英語にかなり慣れることが出来たと実感しています。フィリピン留学での授業は、日本でただ英語の授業を受けるのと違い、英語を喋らなければならないという強制力が働いていたように考えます。日本に帰ってきて英語の授業を受けている際に、そういった環境が整っているのは、英語が上達するのに大切な要素であったと感じました。



フィリピンの語学学校にて。

最後にフィリピンでの生活についてです。日本との違いとして、まず食事代が安かったです。日本とさほど変わらない味で、値段は半分ほどでかなりお得でした。次に交通手段が違いました。タクシー、バイクタクシー、ジブニーが主な交通手段で値段もかなり安かったです。しかし、私は被害に合わなかったのですが、スリ等の危険は存在しているそうです。フィリピンの観光で最も印象深かったのは海です。とても透き通っていて、天国にいるような気分を味わえました。

私は、フィリピンの生活に不便という印象は持ちませんでした。それは、語学学校の設備が整っていたこともあったのですが、外のお店でのサービス面でも問

題はなかったためです。日本と比べて、あまり良いものではないだろうと想像していたのですが、予想を裏切られた形になりました。東南アジアで余生を過ごす人の気分が分かり、腑に落ちています。ただ、サービス面は大丈夫だったとしても、命の危機を感じることもあり、安全面においては安心できないこともありました。例えば、暑い中、露店でずっと放置された肉が売られていたこと。また、目的の場所へ移動する際にバイクに三人乗りで100キロを超える速度で山下りをしたり、15メートルの崖を飛び降りたり等もしましたが、それは危険であると同時にとても刺激を受ける経験ともなり、また、命の大切さも実感できました。このような危険な行為は、日本ではそう体験できることではなかったので、正直にいうと、とても楽しい経験でもありました。

留学は、私にとってとても意義のあるものと感じました。外国に行くことは他の文化や環境に触れ、問題に果敢に挑戦する良い機会となり、自分の成長につながる良い薬であると確信します。是非、挑戦してください。

